

岐阜県方言資料に見られる指定辞

Forms of copula observed in Dialect Discourse Materials in Gifu Prefecture

山田敏弘¹

YAMADA Toshihiro¹

[キーワード Keyword]	岐阜県方言、談話資料、指定辞
[所属 Institution]	¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 岐阜県は、指定辞「だ」に関し、東西の接点に位置する。関西系の「ジャ」や「ヤ」が広く県内に聞かれる一方、県南東部では昔から「ダ」が多く聞かれるなど、県内に「ダ」と「ジャ/ヤ」が混在するという接点らしい特徴をもつ。木曾川を挟んだ対岸の愛知県では、尾張北部の老年層に「ジャ」の使用が認められるが、若年層を中心に「ダ」一色であり、また、長野県でも、基本的に指定辞には「ダ」が用いられる。かつての方言は、このように境界線がかなり明確であった。

一方、現実には、共通語場面以外においても岐阜県内のところどころで「ダ」の使用に出くわす。それは共通語が混じり込んだもので方言として採用すべきでない形式なのか、やはり方言の中に存在する形式なのか。本考察は、この指定辞に関して岐阜県内の方言談話資料から再検討するものである。

使用する談話資料としては、今回、その土地で採取された談話に基づく昔話資料を多く含む、郡上市明宝の『奥美濃よもやま話』、及び、下呂市馬瀬の『馬瀬村の古里のはなし』を中心に扱い、個人的に蒐集した方言談話と岐阜県図書館の『美濃・飛騨古老の聞き書き』からも補充する。自然な方言会話を分析することで、一問一答式の方言調査だけでは明らかにできない岐阜県方言の特徴を、まずは指定辞から記述する。

1. はじめに

現実で使用していることばと、意識の中にあることばは、必ずしも一致しない。このことは、否定の「ン」について質問した際に「「ン」は、使わんなあ」と答えられたという、方言調査での古典的な笑い話にも見られる、事実である。

岐阜県の方言の指定辞に関して言えば、大まかに言って、恵那市の南部を除けば京阪寄りの「ヤ」か、あるいはその古い形式である「ジャ」が用いられると考えられている。方言調査の回答でも「ジャ」や「ヤ」が得られることが多いが、実際には、様々な会話場面で指定辞として「ダ」が現れることがある。この「ダ」は、共通語であって方言形式として採用すべきではないのだろうか。

もちろん、「ダ」が用いられるのは、1つに共通語で話している場面である。どのような人であろうと、共通語と方言とのコードを切り替えて話さない人は、現代、稀有である。学校教育の影響と述べるまでもなく共通語の「だ」は、少しかしまれば普通に用いられる。あるいは、進行等の「トル」や否定の「ン」が混ざるなど、すべて完璧に共通語で話していかなくとも、意識の上では共通語（あるいは「標準語」）で話して

いるという場面もある。特に「方言調査」などという仰々しい名目でお話を伺うことになると、共通語で話そうと意識されることも多々あり、この場合の自然な会話には、「ダ」が混じることもある。

しかし、この共通語という日常的にややかしこまった場面で用いている形式は、方言調査では意識的に排除される。したがって、「これは本だ。」は、共通語であって、方言ではない。だから、岐阜県の指定辞は「ヤ」か「ジャ」であると答えられるし、調査結果を地図にすればそう描かれる（はずである）。

このような実際の調査は、「方言」での語形選択を適切に描いているのであろうか。意識された方言は、意識されない方言と同じであると言えるのだろうか。一問一答形式の調査とその結果は尊重されるべきだが、やはりその形式だけでは方言話者のことばの一部分しか記述していないことにならないか。このことは、方言調査をする人間には、永遠の課題である。

では、どのような方法であれば、特に日常用いられる「方言」の実態を正確に描くことができるのであろうか。意識されない複数話者による自然談話こそ、理想とすべき「方言」をより適切に描く鍵であることは言を俟たないであろう。無意識に発せられた方言談話

から、帰納的に全ての方言形式が得られれば、それが現実のことば、すなわち、その土地の「方言」の実態に近いものであるはずである。

しかし、文法形式は自然談話に現れやすいとはいえず、方言談話から網羅的に全ての文法形式を得ることなど現実的に難しい。それでも、頻用される指定辞、否定表現、進行・結果残存の形式などは得やすいであろうし、方言談話が蓄積されれば、さらに採取されうる形式も多くなる。また、頻用される形式では、記述の正確さも増してくる。自然談話の分析が必要である。

今回は、岐阜県内の方言談話資料（3節に詳述）から、岐阜県内で、恵那市南部を除く地域に観察された方言としての指定辞の「ダ」（方言形式はカタカナで表示する）類について、その分布と解釈を考えていく。

2. 先行研究に見られる指定辞形式の分布と問題点

学校文法で断定の助動詞とされる「だ」には、実際、断定という機能は内在しない。本考察では、このミスリーディングな名称を避け、また、形式を重視することから、名詞を述語とする際、補助的に付加される形式と形容動詞型活用語終止形、及び助詞・助動詞との組み合わせた形式で「だ」に相当する形式をすべて、便宜的に「指定辞」と呼び、その形式を考えていく。

この岐阜県の指定辞に関して、かつて、「ジャ」を広く用いる地域として描かれた（図1）。

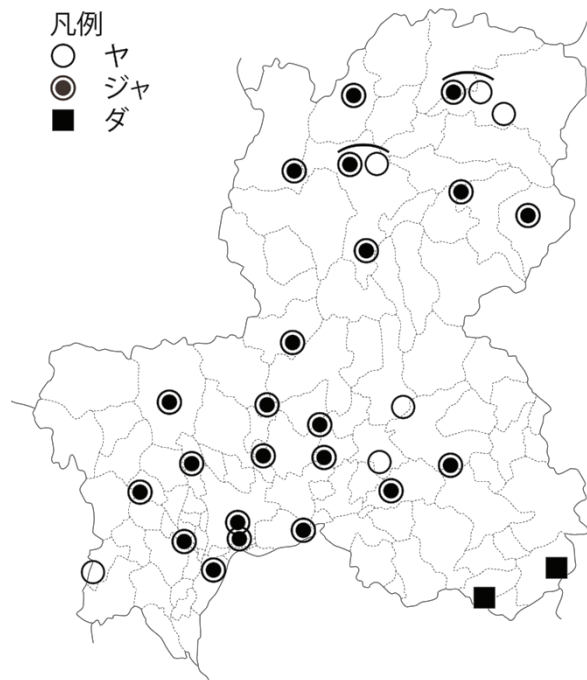


図1 「<いい天気>ダ」

（『日本言語地図』（1966）第46図を基に作成）

図1では、広く岐阜県内の指定辞が「ジャ」として描かれている。ただし、これは、1800年代後半の生まれの方の言語実態を反映した地図であり、かつて、岐阜県内では「ジャ」が優勢であったことを示しているにすぎない。

「ヤ」は、一般に、関西地方の変化が岐阜県にも及んだと考えられがちであるが、滋賀県に接する西濃の他に、飛騨北部と中濃に「ヤ」が見られる。これらは、隣接する富山県南部から陸続きに入ったとは考えにくい分布を呈していたり、まとまった分布から離れていたりする。なぜ、岐阜県内での「ジャ」>「ヤ」の変化は、このようにまだらに描かれているのだろうか。

一方、「ダ」は、恵那市（当時の恵那郡）南部に2地点見られるが、この地域は、「だ」を基本的には用いる地域である。

四半世紀の時を経て刊行された『方言文法全国地図』では、名詞に後接する指定辞の分布を見ることはできないが、「静かだ」という、いわゆる形容動詞の終止形が地図になっている（図2。ただし、飛騨北部では、「静か」の代わりに、同じ形容動詞の「シンビョー」）。指定辞相当部分のみを図に表すと、以下ようになる。

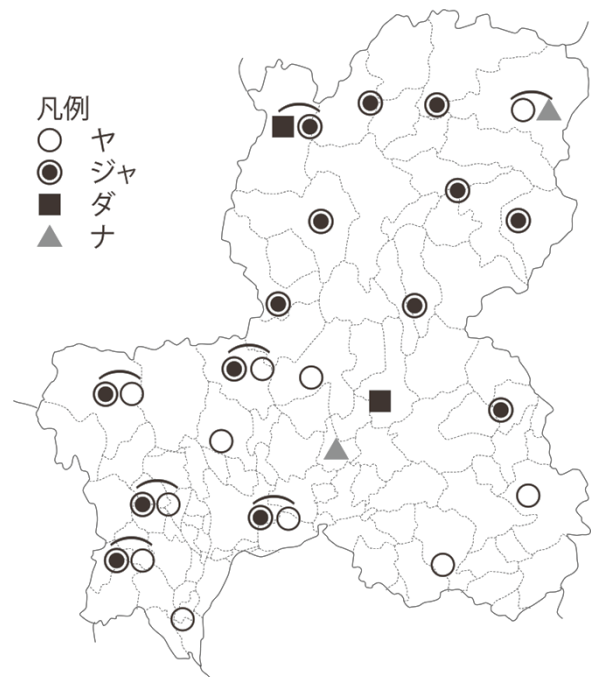


図2 「静かだ」

（『方言文法全国地図』（1994）第145図を基に作成）

刊行年だけを見ても28年経っていることから、1世代隔てて、全般的に●「ジャ」が県南部から変化し、○「ヤ」との併用となっていることなどが見て取れる。

ここで興味深いのは、図1と異なり、岐阜県西部から「ジャ」との併用という形で「ヤ」が広まっている姿が描かれていることである。しかし、この地図だけを見ると、むしろ、「ヤ」が専用として用いられる地点は、愛知県に近い地域に見られ、ややもすると、愛知県から広まっているかに見えることである。むしろ、これは正しい解釈ではない。

さらに他の形式で気になるのは、岐阜県北部大野郡白川村と益田郡(現 下呂市)金山町に■「ダ」が見られること、及び、終止形であるにもかかわらず▲「ナ」が2地点、武儀郡武儀町(現 関市武儀町)と吉城郡上宝村(現 高山市上宝)で見られることである。残念ながら、恵那市(当時の恵那郡)南部での調査はないが、岐阜県内で「ジャ」や「ヤ」以外の「ダ」や「ナ」が現れることは、どのように考えたらよいのか。

「ダ」については、岐阜県内で生まれ育ち、また、実際に方言調査をした経験から、岐阜県内の「方言」とは言いがたいと捉えてきた。「ダ」が回答されるのは、長く教員として働いてきた人に時々、見られる「教養語」としての回答であることが多いからである。実際、『方言文法全国地図』(1994)で「ダ」とだけ回答した益田郡金山町(現 下呂市金山町)の被調査者は1908年生まれの男性で教員を長くされてきた方であった。また、「特別公務員」ともあったことから、教育委員会などで退職後も仕事をされた可能性もある。その頃はまだ方言矯正の時代であったことから、「ダ」こそ正しいことばとして回答されたか、あるいは、無意識に「ダ」を多く使用する環境にいたことが表出したか、いずれにしても、『方言文法全国地図』(1994)第36図・第37図で「子どもだから」を「ダカラ」と回答していること合わせ考えても、「ダ」という回答に間違いがないことが確認できる。これが、当時当地の住民の言語状況を正確に代表する被調査者であったか疑わしい。

一方の形容動詞の終止形として「ナ」が用いられるかについては、岐阜市出身の筆者の記憶でも、「キョーワ、ダレモオランダアンキナ{ニ/ナ}。」(「アンキ」は「気楽」の意)のように、「ニ」や「ナ」のような終助詞に後接する際に終止形として「ナ」が現れやすいことが指摘できる。ただ、終助詞が付加されず「アンキナ。」と言い切る形は記憶にない。今回、『方言文法全国地図』の調査の際に残された記録の詳細を確認する時間的余裕がなく未確認であるが、終助詞を取った形を調査結果として採ったとすれば、「ナ」は、実際、ここに表された2地点以外でも、文内の環境によっては採集しえた形式であろう。

さらに、国立国語研究所共同研究プロジェクト(2011)「方言の形成過程解明のための全国方言調査」の結果を示した『新日本言語地図』(2016)では、やや地点数が減ったものの岐阜県内20地点で、その後の変化を追った調査がなされた。

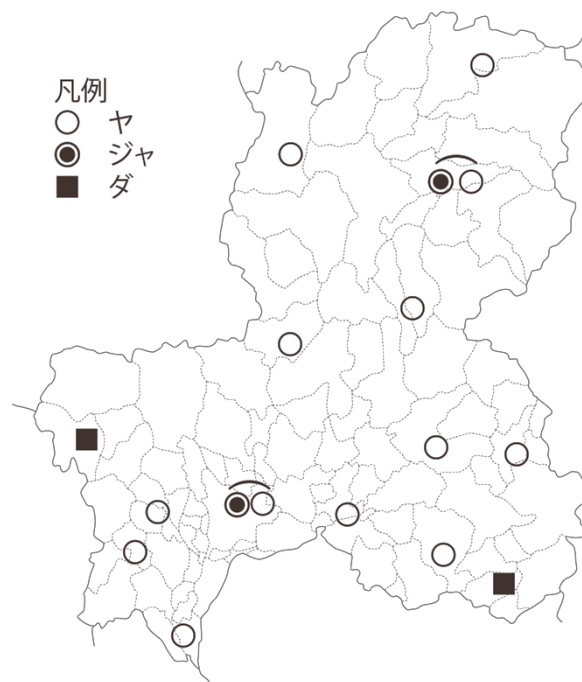


図3 「先生だ」

(『新日本言語地図』(2016)第118図を基に作成)

以前の2図と比較して、やや疎らであることは否めないが、「ジャ」は減り全県的に関西地方と同じ「ヤ」が指定辞として用いられている。

一方、「ダ」に関しては、県東部の恵那市南部明智町で保持されていることが確認されたが、西濃地方北部の滋賀県との県境に位置する坂内地区でも「ダ」が回答されている点が気になる。

この図3の調査には、本考察の筆者みずからが臨んでいる。この回答者は、戦前、郵政省で働き、戦後は警察予備隊を経て地元の役場に長く勤められた方である。形容詞のウ音便や過去の「ナンダ」など、この揖斐川町坂内地区の話者は、一般に方言形を多用するが、指定辞だけは、過去形でも「ヤッタ」や「ジャッタ」ではなく「ダッタ」を用いると明確に回答している。指定辞の他は方言形を回答していることから、共通語意識が混じり込んだとは言えない。ただし、「これは、おれのだ。」というときには「オレノダ。」と併用して「オレノヤデナ。」ともいうと答えているなど、まったく「ヤ」が出てこないわけでもない。

このように岐阜県内の方言調査では、期せずして、指定辞の「ダ」が見られる。それはなぜか。

1つには、歴史的に「デアル」>「デア」>「ジャ」と変化する中で、ごく狭い範囲で、「ダ」に変化したという可能性がある。この場合には、富山県南部のように、一定の地域で同一の回答が得られるはずである。

あるいは、生育環境によって生じた個人的特徴と考えることもできよう。この場合は、たまたまそのような特徴をもった話者を、その地点の代表として選んだだけで、地域の実情とは合わないということになる。

地域で共通した特徴をもつのか、特定の個人の特徴かを確かめるためには、どのようにしたらよいのか。ここでは、自然な談話から確認をしていきたい。

3. 今回使用する岐阜県方言の談話資料

本節では、2節で問題となった指定辞の「ダ」について、検証する談話資料を紹介する。問題となったのは、益田郡金山町(現 下呂市金山町)、揖斐郡坂内村(現 揖斐川町坂内)、大野郡白川村の3地点である。

まず、金山町について検証する。ここで使用するのには、①山田(2004)として報告した、金山町で採取した方言談話資料(2002年6月6日、金山町教育センター、10分ほどの音声を忠実に書き起こした資料。話者は、当時73歳、74歳、68歳の同町出身の女性)、及び、②岐阜県図書館(1971)と、その元データである岐阜県図書館蔵の音声CD『飛騨・美濃古老の聞き書き』(未刊行)の第62巻(益田郡金山町下原の明治9年生まれ女性の語り)の2点である。ただし、②は、実際、採録者との会話の形で進められているが、岐阜県図書館(1971:266-271)では、話の順序を変え一人語りの形に整えられている点に注意しなければならない。

さらに、これだけでは分量として少ない金山町については、近隣地区の談話資料から補った。

まず、郡上市明宝地区の金子貞二(1971-1976)『奥美濃よもやま話』である。本資料は、全5巻、1019pp.にも及ぶ大作である。柳田国男『山の人生』にも引用された子殺しの話なども含む言い伝え、催事、風習、思ひ出話などテーマごとに、304話を所収する。一部金子氏自身の回想を除けば、実際に語った村人の話の録音を発音もひとつひとつ忠実に筆記されている(『奥美濃よもやま話』第1巻「刊行にあたって」より)ことから、当地住民の発話を正確に聞き書きした資料として一級の価値をもつと考えられる。元の話者の音声データ自体は残っていないが、後に金子氏が村内の有線放送で語った際の録音データは残っている。

さらに、下呂市馬瀬地域には、合併直前に編纂された『馬瀬村の古里のはなし』全三巻(2004)がある。前書きに「本書は『消滅しつつある方言の保存』を目的として、村内および村出身者の主な方々に過去の体験や、先祖から聞き伝えなどを語っていただいたものをそのまま記録したものです。また当人の都合により文章で提出されたものが数編あります」とある。すでに音声データは散逸し保管されていない(下呂市役所馬瀬振興事務所副所長 赤梅氏談)が、話しことばで綴られた文章は、基本的に方言での語りを書き起こしたと理解されよう。

紙幅の都合で、本考察は上記の金山町周辺について重点的に検証するが、ほかに、揖斐川町坂内と大野郡白川村についても簡単に触れる。揖斐川町については、『飛騨・美濃古老の聞き書き』(未刊行)第56巻として音声が残されている。岐阜県図書館(1970:192-198)にも書き起こしがあるが、音声として「ヤッタンデス」となっているところを「やったです」と書いていたりするなど、かなりの改変が認められる。また、大野郡白川村については、山田自身が採録・書き起こしに携わった大阪大学文学部日本語学(社会言語学)講座(1997)の『飛騨白川郷方言談話資料』がある。こちらは、白川村内3地点で収録した約3時間分の音声資料から、土地の人だけで話が進んでいる部分約1時間を正確に書き起こした資料である。「考察」に指定辞の記述はないが、「のだ」相当の文末表現として「ンヤ」に加えて、富山県内で用いられる準体助詞「ガ」を含む「ガジャ」「ガヤ」が用いられていることが記されている。

今回は、金山町を中心に、他の2地点についても補いつつ、指定辞形式について検討していく。

4. 金山町の談話資料から見る指定辞

金山町については、まず、山田(2004)の10分20秒の談話中、「ヤ」が36回、「ジャ」が「ナンジャコレ」の1回聞かれたが、「ダ」は確認できなかった。

- ・ ウチラデ ツクル ホーバモチヤトサー モット コレガ ニエテマツトルデナー。コレガ センセン ヌムスヤロー ムスヤロー。ムシタノオツツム ソーヤネ。(山田2004:24)

このとおり、少なくともこの地点で指定辞として「ダ」のみが用いられるということは確認できなかった。

一方、より古い資料である『飛騨・美濃古老の聞き書き』の音声は、録音状態が悪く判別不能な箇所

があったり、調査者のことばが話の主題として書き起こされていたりして、音声だけから数を数えることはできないが、岐阜県図書館(1971:266-271)に書き起こされた内容と照らし合わせると次のような状況である。

- ・ 勉強なんてせえへなんだけど一年生のときじゃった。(中略)比較試験でのがあったけど、そのとき一等賞で、免状や褒美をたんとむらったわ。どんな問題やったやら覚えな^いわな。(岐阜県図書館(1971:267))

この「一年生のときじゃった」は、実際の音声で「イチネンセーノ トキヤデ」となっており、また、「褒美」の内容は書かれていないが「カミ(紙)ヤ」となっているなど、全般に「ヤ」が多く用いられている。反面、成績優秀であったことを述べる際に、「ソージャケドネ」と「ジャ」の含まれた接続詞も用いている。それでも、岐阜県図書館(1971:266-271)では、「ヤ」が優勢で38回、「ジャ」は4回見られた。「ダ」は、確認されず、また音声CDも聴いた限り、金山町の談話に「ダ」は確認されなかった。

この2つの談話分析の結果から言えるのは、この金山町で指定辞の方言形式として「ダ」を採用することは難しいということである。今回検証した2つの談話の話者は、いずれも女性であったことから、性差もあるのかもしれないし、また先に述べたように経歴による可能性もある。それでも、益田郡金山町で指定辞に「ダ」を広く用いるとは言いがたいという結果となった。

5. 『奥美濃よもやま話』の指定辞

前節で性差を含めた個人差の可能性を指摘した。では、より大きな談話資料を検討したらどうだろう。今回は、金山町にも近い郡上郡明宝村(現 郡上市明宝)の『奥美濃よもやま話』を見ていく。同書は5巻本であるが、まずは第1巻の指定辞を、単純に数えてみた。

5.1 『奥美濃よもやま話』各話の指定辞

『奥美濃よもやま話』には、特に話者名が書いてない話がいくつかある。それは金子氏(1912-2001)自身の回顧談と考えられ、共通語で書かれている。当然、引用部分を除いて指定辞は「だ」が用いられており、それらの話は考察の対象から除いた。

「*」が付けてある話は、丁寧体で語られており、地の文の文末は「です」か「ます」である。これらの丁寧体形式は本考察の対象ではないため数えていないが、

その話の中で直接話法で引用された発話や従属節において用いられた形式の数を挙げてある。

	性別	「ダ」	「ヤ」	「ジャ」
第3話	男性	0	0	17
第15話	男性	0	2	18
第16話*	男性	1	0	1
第17話*	男性	4	0	0
第18話*	男性	1	1	2
第19話*	男性	1	0	0
第20話*	男性	7	0	0
第23話*	男性	0	2	1
第24話	不明	0	23	3
第27話	男性	0	8	4
第29話	男性	(2)	15	4
第30話	男性	1	7	1
第31話	男性	0	19	4
第34話	男性	0	35	20
第35話	男性	14	31	1
第36話	男性	12	11	0
第37話	男性	0	36	4
第38話	男性	0	28	2
第39話	男性	0	23	12
第40話	男性	0	14	10
第41話	男性	0	7	4
第42話	男性	0	17	2
第45話	男性	0	22	3
第46話	男性	0	25	5
第47話	女性	0	37	0
第48話	女性	0	47	0
第50話	不明	0	50	1
第52話	不明	0	21	27
第53話	男性	0	26	5
第54話	男性	0	35	5
第54話	男性	0	40	3
第55話	男性	0	39	3
第58話	不明	1	10	0
第59話	女性	0	36	4
第60話	女性	0	26	2
第61話	女性	0	18	2
第62話	女性	0	45	1
第63話	女性	0	28	0
第64話	男性	0	25	10

第65話	男性	0	29	2
------	----	---	----	---

表1 『奥美濃よもやま話』の指定辞

第29話の「(2)」は、採話部分の前に添えられた金子氏の話に現れたものを指す。各話者の生年などは記されていないが、出版年に思い出話を語れる年代とすれば、おおよそ明治生まれの方と言ってよいであろう。

5.2 「ヤ」と「ジャ」の使用例

表1を見ると、全体として、「ヤ」が838例、「ジャ」が183例となっており、「ヤ」が圧倒的に優勢である。しかし、第3話は、明治18年生まれの方の話で、すべての指定辞が「ジャ」となっているなど、話者の生年による差も大きい。第15話でも「ジャ」が優勢となっているが、話者の生年は記されていない。

これらの話を除けば、同一話者が「ヤ」も「ジャ」の両方を使用するのが一般的であり、実際の使用は、一時期、いずれかの形式に限定されず揺れがあったことがうかがわれる。

今回数は数えなかったが、金子氏の回想と思われる話で、引用文で用いられる指定辞も興味深い。第49話で1回「ヤ」が用いられているが、その他の第22話、第26話、第28話、第51話では、いずれも「ジャ」が用いられている。明治末の1912年生まれの金子氏の記憶に残っている先達の方言形式としては、「ジャ」であったということであろう。第52話は、話者の名前がないことから金子氏の回顧談と考えられるが、こちらも「ジャ」が優勢で、同様の傾向が見られる。

このように、昭和45(1970)年に昔のことを語る明宝の「古老」の話しことばは、すでに「ジャ」から「ヤ」に移りつつあり、多くの話者が併用状況だったと言える。方言調査では、あえて伝統的な一昔前の形式を答えてくださる方も多いが、その意識と実際の使用とのずれは、前ページの表に現れている通りである。

5.3 「ダ」の使用例

『奥美濃よもやま話』には、「ダ」が用いられる話も多い。次の用例は、話全体が共通語として発話されたものであり、指定辞には「ダ」が用いられている。

- ・ 節句といえば、ヒイナサマだ。父母などは、ヒイナサマのことをデコノボと言っていた。(第44話)
- ・ イタチは、(中略)隙間からはいり込んでコイを盗むと、父がよく言ったが、そんな芸当がはたし

てうてるものだろうか。(第49話)

このような文体での「ダ」は、この土地の「方言」の一側面を表してはいるが、やはり共通語意識で語られたものである。しかし、次のような用例はどう考えたらよいのだろうか。

- ・ わしも、はじめは、気良へ装蹄してもらいに行ったけど、しまいにや、わたしゃ装蹄を習ってきたもんだで、大分、小川の人たちにもうってやったり、小川へは、益田からも大分装蹄師が来とったな。(第30話)
- ・ 兎を飼いあげたものが馬やってことは、本にも出とりますかね。だから臆病者だでね、兎とひとつで、何かひよっと見た瞬間、おぶれてやあばれることもあるでな。(第35話)
- ・ わし、ヒゴなんかも作ったが、ナラの木のヘイだもんで、笠も作って被った。(第58話)

第30話と第35話の用例では、「だから」に相当する「ダデ」に、方言でしか用いられない接続助詞「デ」が含まれている。第58話の「ダモンデ」も、共通語との意識で東海地方で用いられることはあるが、やはり共通語形式とは言えないであろう。つまり、これらは方言として用いられた指定辞「ダ」なのである。

実際、明宝歴史民俗資料館で行なわれている『奥美濃よもやま話』を読む勉強会で、参加者の一人(1947年生)から、昔から明宝では「ダ」を使うことがあると証言が得られた。

割合としては、表1で見たとおり、方言談話において「ヤ」あるいは「ジャ」の優勢は変わらないが、「ダ」は、網掛けしたような談話で方言として用いられている。この話者の指定辞使用はどのように描けばよいのであろうか。

第35話では「ヤ」と連続する文で用いられているなど、入れ替えも激しい。第35話と第36話は同じ話者によるものであるが、今回の調査範囲では、この話者の個人的な性質による可能性は高い。話者は、馬の買い付けの仕事をしており長野県にもよく行っていたことが語られている。この馬を戦争で徴発されたとの話の際にも「ダ」が多く用いられている。

ただ、このような話の内容で指定辞が変わることは、まったくないとは言えないとしても、内容に関係なく「ヤ」も「ダ」も混ざって使われている場面もある。

- 昔は、畑佐峠の生命やったでね馬が。まあ、炭をつけてきて米をつけてあげる輸送機関の生命やったでね。そうだけれども、昔は峠の道のワルイところを馬で通ったもんやが、オンゾの谷で水を飲ませりゃ、もう四つも五つもつらってのぼっていったんやでね。逃げていくこたできんで、屋根のないトンネルに行くようなものだでね。片側へ行きゃもうガガスで落ちるし、そらへは急でのぼれんもんだでね。(第36話)

このような特徴は、個人的な特徴として記述されるべきもので、この土地の方言全体を表すものではないのかもしれない。しかし、余所の土地との交流を通して得られたと考えられる形式を併用することがあったことは否定できないだろう。そのことで、「明宝方言では『ダ』も使われる」という認識が得られたと考えられる。この問題は後述するとして、文法的環境の影響は考えられないだろうか。今回、この第35話・第36話の指定辞を環境ごとに表すと次の表2ようになる。

	。	ト	ッテ	ケド	クレ ドモ	ガ	ツタ	デ	デネ	カラ	エデ	ガネ	ソナ	ー	ネ
ダ	0	1	0	0	1	0	1	5	9	1	0	3	0	1	4
ヤ	5	4	1	3	0	1	8	4	10	0	1	2	2	0	3
ジャ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

表2 『奥美濃よもやま話』第35話・第36話に見られる後接する形式別の指定辞数

どれも少数の使用であり、差が明確にあると言えるのは過去形の「ダツタ」と「ヤツタ」くらいである。他にも終止形や伝聞の助詞の前では「ヤ」が主流であることから、やはり、方言としては「ヤ」を第一に用いていると言えそうである。一方、原因・理由の接続助詞「デ」が後接する場合には、「ダデ」も「ヤデ」もほとんど数量的に変わず用いられており、さらに終助詞「ネ」が続く「ダデネ」も「ヤデネ」も差はない。つまり、方言としてしか用いられない接続詞の前で、「ダ」も「ヤ」も同じ程度に用いられているということである。このことは、「ダ」も、「ヤ」同様に方言の指定辞として用いられているということの証左でもあるが、接続助詞の「デ」の前で、比較的多く「ダ」が用いられていることが気に掛かる。

今回、『奥美濃よもやま話』を全話調べることはできなかったが、もう一人、第5巻第255話・第256話の話者にも特徴的な使用法が見られる。

この話者は、文末の「ヤ。」、過去の「ヤツタ」や

推量形の「ヤロー」をはじめ、終助詞との組み合わせである「ヤナ」や接続助詞との組み合わせである「ヤデ」、「ヤケド」「ヤガ」、「ヤト」などほとんど例外なく指定辞には「ヤ」を用いているが、1つだけ必ず「ダ」を用いる形式がある。それは原因・理由の接続助詞「モンダデ」である。

- こいつは、弾おばせて、三日程捜いとして、やつと三日目に死んだるやつを見出したようなしこで、すんぐハラが抜けなんだもんだで、ガスが回ってまったらしいんやな。(第256話)
- 日出雲で泊まって、次の日、馬瀬の川上まで行ったんや、角善さが、おるか、おらんかしらんが、クマは、はいつとる形勢やって言ったもんだで。(第256話)

上記以外にも、第256話では、計8回、指定辞に「ダ」を用いているが、すべて「モンダデ」の形である。数の上では、「ヤ」が181回用いられており圧倒的に優勢

であるが、決まった形式との組み合わせの場合だけ「ダ」が用いられていることは、注目に値する。

なお、指定辞が形式名詞に後接する「モンダ」は「モンヤ」と同じく7例、準体助詞に後接する「ンダ」

は10例に対して「ンヤ」は13例であった。いずれも大きな差は見られなかった。特定の形式と結びつく指定辞に偏在が見られるのはどういうわけか、後で考える。

5.4 形容動詞型活用終止形としての「ナ」

表には載せなかったが、伝聞話として語られる場合、「そうな」で文が終わる場合がある。

- そんで、尼様は、二、三度な、声をかけてみないたそうな。(第40話)

共通語意識もあるこの形式は、方言として用いられているのであろうか。上の用例では「かけてみないた」と郡上方言でよく用いられる敬語形式を含んでおり、方言意識がある文体で語られていると認定できよう。

それでも、「そうな」は、昔話の定番形式として、全国各地でも使われうる形式である。これだけでは、明宝方言に「ナ」という終止形が見られるとは言えな

い。しかし、「そうな」以外でも、次のような用例が談話資料から得られた。

- ・ 清まの親指はいかいなで、そりゃひどいもんやぞよ。(第24話)
- ・ 今は地方が来て買うそうなでね。バクロウが十万てや十五万、十五万てや二十万つける。そういう、また好きな人がおるそうなでね。(第35話)

「イカイ」は「大きい」という意味であるが、「イカイコト」で「たくさん」という意味にもなる。「コト」に係る形式から考えれば形容詞ということになるが、郡上高校編(1952)には、「ヤット ミンウチニ イカイン ナッタナ」という用例もあり、形容動詞型の活用も認められる。

この「イカイ」が形容動詞型活用をすれば、原因・理由を表す接続助詞「デ」に続くのは、通常、当地の文法で考えれば「イカイヤデ」のような、指定辞「ヤ」の終止形を含むはずである。しかし、「イカイナデ」と「ナ」の形を採っていることは、形容動詞の一部に「ナデ」となることがあるということである。

実際、筆者自身も、祖父も父も出かけている日に「キョーワ アンキナデ オカズナシデ スマソカ。」と祖母の言う「形容動詞語幹+ナデ」の形を、岐阜市の方言として記憶している。ただ、「ガッコーナデ」のように「名詞+ナデ」は記憶にない。今回、『奥美濃よもやま話』の形容動詞型活用語に限っては、「ナ」終止形の形も認められよう。つまり、図2の▲は、尋ね方によって県内広く聞かれうる形式であると言える。

5.5 まとめ

郡上市明宝地区の『奥美濃よもやま話』から、『方言文法全国地図』(1994)第145図に観察された金山町の指定辞の「ダ」が、方言として採取された形式であるかを検討してきた。

金山談話資料では確認できなかった「ダ」は、確かに個人としては、「ヤ」を主体に「ダ」も、環境によっては同程度に用いる話者が、この明宝地区に存在した。ただし、表1・表2を合わせて考えると、指定辞としての「ダ」は、けっして地域の代表的な形式ではなく、特定の話者の独自の経歴によって身につけられた、いわば外来の性質であると言える。

6. 『馬瀬村の古里のはなし』

第5節で考察したように、指定辞の「ダ」の使用が、

個人の経歴や文体によるものである可能性がある。このことを証明するために、旧益田郡馬瀬村(現 下呂市馬瀬)の談話資料をしてみることにする。

馬瀬の談話資料『馬瀬村の古里のはなし』において、方言スタイルで語られている部分は、1例の例外もなく、指定辞は「ヤ」が用いられている。

- ・ おね出いたところは、そこの別荘のところで、そこで車に積んだんや。(p.60)

上記用例では、「オネル(背負う)」という動詞が組み合わされた「出ス」という複合動詞がサ行イ音便形を採っており、方言スタイルで語られていることが明確である。この場合「ダ」は用いられず「ヤ」となる。

ただ、『馬瀬村の古里のはなし』で指定辞「ダ」が用いられないというわけではない。明らかな共通語での会話では、「ダ」が指定辞として用いられる。

- ・ しかも自動でもなく、すべて手仕事での準備ですから、冬など朝早くから起きての準備は大変だったと思います。(p.28)
- ・ 高山の国立療養所へ転勤した。高山荘だな。そうしとったら、東京の友達から、最終の博士号取得の機会があるからと言ってくれて、順天堂大学の放射線科へ入った。(中略)今は大学院へ行かないと駄目だが、昔は、教授が研究テーマを出されていた。(p.320)

この「ヤ」と「ダ(だ)」は、話者ごと、談話のスタイルごとに明確かつ厳密に使い分けられており、明宝資料のように混在することは、『馬瀬村の古里のはなし』全3巻の中には1例も見られなかった。現在ともに下呂市になっている旧益田郡金山町と馬瀬村で、すべて方言が同じとは言えないが、少なくとも下呂市全域で指定辞に「ダ」が共通語以外に使われる可能性は極めて低いと言えるであろう。とすれば、やはり図2の金山町の「ダ」は、特殊な経歴によって得られた個人的特徴を反映したものと考えざるを得ない。

ただし、上に挙げた『馬瀬村の古里のはなし』第1巻p.320の話には、「しとったら」とある。このように、共通語でなくとも、方言スタイル専用と必ずしも言えない形式もある。結局、どこまでを共通語と認識するかは、話者に依るのである。

7. 『飛騨白川郷方言談話資料』

紙幅の余裕がなくなってきたので、残りの2地点については、簡単に述べておく。まず、白川郷資料については、南部の平瀬集落はダム建設工事のため、かつて余所からの流入が多く、また、最北端の小白川集落は富山方言の影響を大きく受けているため、合掌集落で有名な荻町集落に限って考察をおこなう。

今回、この荻町集落での談話は、大正9年生まれ男性、同13年生まれ女性、同15年生まれ女性（以上3名は白川村出身）、同12年生まれ男性（郡上郡白鳥町出身）の四人の話者で語られ、30分以上、ページにして、50pp.あることから十分な資料と言えよう。この荻町資料では、「ヤ」は316例、「ジャ」は21例、「ダ」は4例の使用が確認できた（引用では同資料に付けられていたアクセント記号を除いてある）。

- ・ イトシイッテ アノー フツー ナニガジャ
アワー コイシートイウ イミナンジャガケド、
シラカワデワ イトシイツツート カワイソー
ダト イウ イミヤナ。(p.1)

この用例は、会話冒頭部分でまだ慣れていなかった可能性もあり、「ヤ」、「ジャ」、「ダ」、すべてが含まれている。しかし、この後の会話は「ヤ」が主流で「ダ」は、「ナンダナァ」(p.3)、「ダッテ ケッキョク」(p.18)、「デンワダヨ」(p.18)しか用いられていない。少なくとも、1996年時点で、白川村荻町地域で指定辞としては「ヤ」が圧倒的に優勢であり、「ダ」は、日常語としては稀れであったということである。

この結果だけで『方言文法全国地図』(1994)で、指定辞に「ダ」が併用語形として回答されたということの間違いだと言うつもりはないが、「ダ」を第一回答とするのは、特別な経歴をもった話者と推察される。

実は、坂内村でも、岐阜県図書館(1970:192-198)では、「ヤ」が26例、「ジャ」が7例で、「ダ」は1例も観察されなかった。にもかかわらず、今回の調査で「ダ」が確認された点では共通点がある。次節で考察する。

8. 考察

以上、方言談話資料の考察から、岐阜県内で用いられる指定辞の「ダ」は次の可能性がある。

- ① 地域差：特定の地域に偏っている
- ② 個人差：地域内で特定の個人が使用している

地図で表現されてしまうと①のように思われがちであるが、実際には、恵那市南部を除いて②の可能性が

高い。特に文法事項では、回答者の経歴が語形選択ににじみ出てくる。地域の知識人として紹介されて元教員という人に話を訊くと、染みついた職業語としての共通語（意識として「標準語」）が、無意識の文法形式として会話にも反映されてしまうし、それが意識化されることもある。これが金山町や坂内村に刻まれた■という記号、すなわち「ダ」の本質である。

しかし、談話資料分析からは、さらに個人個人の次の一貫性段階も考慮に入れなければならないことが分かった。

- A) 常に安定した形式選択をする。
- B) ランダムに形式を選択する。
- C) 特定の形式との結びつきで形式を選択する。

山田(2004)の金山町話者や、『奥美濃よもやま話』第47話、第48話、第63話の話者などはA)であり、安定して「ヤ」のみを選択している。一方、『奥美濃よもやま話』の相対的に古い時期の第3話などでは安定して「ジャ」が選ばれている。これもA)である。それ以外は、B)の段階にある。

となれば、図1に「ジャ」が多いことも、図2のまだらな変化も、過渡期とも言えるこのB)段階をどう拾ったかのさじ加減の可能性も出てくる。つつい記憶力のいい回答者の意識の中にある古形を掘り起こしてしまうことは、強要された「理想型」の回答であり、決してその地図は変化の境界線を正しく描かない。

一方、第5節で検討した結果で見れば、C)のような人が、その地域に一定数存在していることがわかる。明宝の「モンダデ」は外来形式であり、この一例でもって「ダ」がこの土地の指定辞を代表するとは考えられないだろうが、さらに進んで「ダデ」のような形式に広がりを見せれば、「『ダ』も使う」との意識が持たれやすくなる。余所と交流のある人の言語接触による結果は、特に、はえぬき男性であっても、公的機関や教員としての経歴以外にこの点に注意が必要である。

では、どのような調査方法であれば、その地域の言葉を正確に代表した形式を調査できたと言えるのだろうか。語彙形式は一問一答形式の方言調査でよいとしても、文法形式は無意識に使用する形式と、意識して回答された形式とが必ずしも一致しない。方言地図に描かれた形式の解釈は、信頼しうる調査者のもたらした結果であっても、その調査地点の側面でのしかないといふと用心しなければならない。それを補うのが方言談話資料である。

現代ではさまざまな言語を聞く機会を私たちはもっている。当然、ことばも混ざり合う。特に文法形式は

無意識に持ち込まれやすい。

さらに言えば、指定辞は、必ずしも隣接する地域からの影響によって変化するものではない。第2節で指摘した飛び地のような語形分布は、単純に回答者の年齢による時差かもしれないが、その回答者が一時期でも滞在した場所の言語的特徴を持ち込んだ可能性もある。指定辞以外でも、山田(2020:16)で指摘したように、東濃地方の否定辞の変化は、関西地方の変化が及びやすい西濃地方よりも先んじて進んでいる可能性がある。文法形式は、語彙とは異なる伝播を考えなければならない。共通語の「サ入れことば」を考えるまでもなく、文法形式は無意識に入り込みやすい。より正確に言えば、使用は意識的であっても形式選択は無意識であることもあるのである。

共通語研究でも、談話資料(コーパス)から実際の運用を考察した論考は、すでに当たり前となっている。方言でも談話資料(コーパス)を利用したいところであるが、現代の方言資料であればまだしも、過去の(より理想とされる)方言資料は、分量も乏しく、また整備が不十分で、資料として使用するのも困難なことが多い。今後の整備を急がなければならない。

9. おわりに

きっかけは、方言研究者の先輩からのひと言だった。「山田さん、岐阜県にも『ダ』を使うところが報告されているけど、どう思う？」そう問われて、さほど深く考えず、調査で得た実感とは異なると告げた。

実際、考察をしてみて、それほど簡単な話ではないことを知った。指定辞に「ダ」も現実的には使われている。それは地域を代表する形式ではないが、現実には、「方言」としても使われている。文法形式には、揺れを包含する時期を経て安定期へと移行するものもある一方、経歴に大きく左右されて選択される形式もある。特異な属性をもつ回答者がその地点の代表となれば、方言分布という水面に波紋を起す。複数の言語コードを使い分ける時代には、一問一答ではない調査も必要である。

では、どのような方言調査の結果がその地域の「方言」をより正確に表したものとなるのであろうか。文法形式については、やはり談話から、どのような形式が併用されていて、どの程度の割合で揺れがあるかを丹念に調べるしかないであろう。

私自身、日本語共通語の文法研究でも、内省のみを頼りにした理論的研究には違和感を覚え、より多くの人の「判断の揺れ」も含めた実相を描くことを是とし

てきた。それこそが「言語の記述」であると信じているし、人一人が、意識的にも無意識にも常に同じ形式を使っているとは考えていない。方言研究も、地理的分布が1人の代表によって描けるのか、それは、言語接触が多くなればなるほど、大きな疑問にもなってこよう。若者の方言を探れば、明確な境界線は、県ごとに分布が決まりやすい学校方言を除いて、入り組んでしまう。今後の方言分布の研究では、どのような地図の描き方・捉え方がより適切なのか考えていきたい。

【付記】

本研究は、科研費基盤研究(C)「昭和40年代採録岐阜県方言談話資料作成とその分析」(課題番号17K02771 研究代表者:山田敏弘)及び「岐阜県方言に関する昭和音声資料の分析」(課題番号21K00546 研究代表者:山田敏弘)の成果の一部である。

【謝辞】

郡上市明宝歴史民俗資料館にて、毎月開かれている『奥美濃よもやま話を読む会』のメンバーの皆さんには、同資料に関する情報を多くいただき、たいへんお世話になりました。

参考文献(引用した談話資料を除く)

- 大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図—分布図で見渡す方言の世界—』朝倉書店
- 岐阜県立図書館(1970)『山と水に生きる 濃飛古老の聞き書き 中・西濃篇』岐阜県立図書館
- 岐阜県立図書館(1971)『山と水に生きる 濃飛古老の聞き書き 東濃・飛騨篇』岐阜県立図書館
- 岐阜県立郡上高等学校方言研究会編(1952)『郡上方言 第1集語彙編』
- 国立国語研究所(1966)『日本言語地図』第2集
- 国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図』第1集
- 山田敏弘(2001)「美濃方言の原因・理由表現」『岐阜大学教育学部研究報告-人文科学』51-1, pp. 1-22
- 山田敏弘(2004)『ぎふ・ことばの研究ノート 第3集 方言談話資料とその分析①』科研費刊行物
- 山田敏弘(2020)「『飛騨美濃古老の思い出話』の方言資料的価値2」、『岐阜大学教育学部研究報告-人文科学』68-2, pp. 11-20

(令和5年9月7日受理)